



## 第85回(平成25年5月8日)定例会の研究発表要旨

### 札幌の除雪今昔

新発寒 立花 邦雄 氏

#### ～ 札幌の除雪はどのように進化してきたか ～

明治2年10月(旧暦)、島義勇判官は極寒と積雪に苦しみながら札幌の開拓本府の建設に取りかかった。それから100年余、札幌オリンピック冬季大会を見事成功させ、現在人口が200万人に届こうとする大都市に成長した。

しかしながら、朝の通勤通学に支障がないよう人々が寝静まった深夜、大勢の除雪関係者や除雪車が活動し道路を守っていることを記憶に止めてほしい。

これまでの除雪の歴史を振り返ると、



・明治から昭和期にかけては、除雪と云うより人力で(時には屋根まで積もった!)雪を踏み固めて歩行の用に供することが一般的であった。また幹線道路の除雪は行われず、馬そりによる輸送が行われた。

・第二次大戦後、札幌市では進駐軍の要請により除雪機械を4台、軍から借用し(当時、市の保有機械ゼロ)進駐軍施設周辺の機械による除雪を行った。これが**本市の機械による道路除雪の始まり**である。

・除雪には多大な予算を要するため、1956年には「雪寒法」が制定され、雪寒地域の除雪に国費補助が認められるようになったことは大きい。翌年「第1次雪寒五カ年計画」が策定され、本格的な道路除雪が進められた。

・1966年(昭和41年)には第11回冬季オリンピック大会の「1972年札幌開催」が決定し、市民が喜びに沸いた。実は札幌市が開催地に決定したのは2度目であり、1940年(昭和15年)第5回大会が開催されるはずであったが、戦争のため涙を飲んで返上した歴史がある。

・翌1967年(昭和42年)には冬季オリンピック大会を成功させるため、独自の「除雪五カ年計画」を策定し、拡幅除雪、運搬排雪、歩道除雪、除雪ステーション、坂道交差点ロードヒーティング設置等が盛り込まれ、**札幌の近代除雪の始まり**となる。これによりオリンピック大会は整然と行われ、近代除雪の成果が内外共に認められた。

・1970年ころから凍結路面に効果があるスパイクタイヤが急速に普及し、車粉公害が社会問題となった。1990年に日本での製造が中止となり、**脱スパイクが達成**された。スタッドレスタイヤの普及により今度は「つるつる路面」が新たな問題となり、坂道ロードヒーティングの整備を拡充する一方、電気、燃料代節約のため凍結防止剤、滑り止め剤の試験研究を開始し実施した。

・その後「雪さっぽろ21計画」「札幌市雪対策基本計画」「札幌市冬のみちづくりプラン」等、利雪・克雪に向けた様々な計画が策定され現在に至っている。

(文責 立花邦雄)



## 手稲山頂からキリマンジャロ頂上へ

富丘 斎藤 隆夫 氏

私が毎日仰ぎ見る手稲山と、憧れのキリマンジャロ山登頂記です。

手稲山は手稲区と西区に跨る標高 1,023.1m で、森林資源と地下資源、スポーツ・レジャー、無線送信所・中継所があり、市民・道民・国民生活の中で重要な山で、また、市内小中学校校歌に歌われる希望の山である。

キリマンジャロ山は標高 5,895m アフリカ大陸東岸のタンザニア国に位置し、大陸の最高峰です。頂上に氷河を抱き、文豪ヘミングウェイが「キリマンジャロの雪」物語を執筆しています。有名コーヒーの「キリマンジャロコーヒー」はタンザニアが原産地です。

若いときからこの山に憧れ、登頂したいと思っていました。

退職後のまだ体力があるうちにと、登山の挑戦を決意し4年前の62歳の時に登頂を果たしました。初めての海外旅行であり、登山の準備と体力維持に、手稲山と羊蹄山でトレーニングをして、登山は高山病に悩まされながらも登山仲間の協力で、目的を果たして帰国できました。

登山は5泊6日のテントキャンプ生活で、登山者12名ほか登山ガイド・ポーター・コックさんなど総勢55名です。キャンプ地での夜は満天の大きな星空に感動しました。登頂の感動に浸るまもなく記念写真を撮り、高山病におそわれ早々に、最終キャンプ地に下山しました。



6日目に下山口に戻ると空気が凄く柔らかく暖かく感じ、身体が楽になりました。

登山後はケニアのアンボセリ国立自然公園で、象・キリン・しま馬など多くの動物の自然の姿を観ることが出来ました。

旅行で感じた事は、ケニア・タンザニア国とも赤道近くの国ですが、標高が高いので気候は湿度が低く涼しいです。

交通は両国とも日本と同じく左側走行で、車は95%位日本の中古車です。日本車は故障が少ないので高評判とのこと。また、地震が無いので低層建築物の梁は無筋でよい様です。

人類発祥地から多くの感動を土産に無事に帰国しました。

### 次回の予定

次回(7月10日)は、札幌管区気象台予報課の講演「石狩地方と気象特性」と西尾貞敏氏の研究発表「手稲山と手稲金山から知る日本列島史」を予定しております。

会場は、視聴覚室です。

= ◆ = ◇ = ◆ = ◇ = ◆ = ◇ = ◆ = ◇ =

### 初代会長・小林幸男氏逝く

郷土史研初代会長の小林幸男氏が5月23日、札幌大病院で心筋梗塞のため亡くなりました。87歳でした。通夜は24日夜、告別式は25日、富丘2-5、ていね北海斎場でしめやかに行われ、多くの知人、友人が別れを惜しみました。

喪主は、妻・影津子さん。自宅は手稲区富丘4-4-11-23。こども2人。孫4人。

本会設立当初の平成17年10月から3年間、会長に就任、平成20年ころから腹部大動脈瘤の手術を受けて以来体調を崩し、顧問に退いていました。会から茂内義雄会長名の弔電が打たれ、本会副会長で、手稲中央小学校同窓会長の一ノ宮が弔辞を述べました。

教職42年といいます。振り出しは軽川国民学校(現・手稲中央小)。予科練出の猛烈教師だったため、体罰は当たり前。ゲンコツ、整列ビンタの連続で、現在80歳前半に当たる児童は、何度もその洗礼を浴びた、と、葬儀の司会者が紹介しました。実弟を担任したとき、弟に手を抜いたと見られるのを避けるため、一段と力を込めたといわれます。

最後は石狩・花川南小校長で恵庭、当別、浜益など石狩支庁管内を転勤しました。一ノ宮の小学校5、6年の担任です。管理職となってから低学年の国語教育に新機軸を発想、高い評価を得たといわれています。昭和61年2月、回想録「よしのずい」を発刊しました。

石狩管内青年団陸上競技大会3段飛びの記録は、8年間も更新されなかったというのが自慢でした。

退職後は、生まれ故郷の富丘に戻り、町内会役員をはじめ、手稲スキー協会、手稲中央小学校同窓会、退職校長会会長など多くの要職をこなしました。クラス会に招待されると決まって体罰が話題となりましたが、先生は「もう、その話はやめてくれ」と繰り返していました。

(文責・一ノ宮)